平成３０年度

学校評価報告書

帝塚山高等学校

学校法人帝塚山学園

平成 30 年度学校評価について

帝塚山高等学校は、平成 30 年度の教育活動及びその他の学校運営の状況について、学校評価を実施しました。

学校評価は、本校生徒とその保護者、卒業生を対象とした各アンケート結果、保護者等との懇談会で寄せられた御意見等を活用のうえ自ら評価を行い、さらにその結果について学校関係者による評価を行いました。

このたびの結果を踏まえ、更なる教育水準の向上を目指して、教育活動及び学校運営の改善工夫に組織をあげて継続的に取り組んでいく所存です。

帝塚山高等学校
校長　池辺　政人

１．　総括

建学の精神	「社会に有為な人材を育成する」
本校の重点目標 （教育目標）	「人間力の育成と個々の進路を実現する教育の推進」 “個性・特性を伸ばし「知の力」「情の力」「意志の力」「躯幹の力」をバランスよく鍛え、高い知性と豊かな情操を備えた生徒を育成する”
前年度の成果と課題	［成果］ 個性・特性を伸ばす教育を推進するため、教科会を中心としたプロジェクトチームによる検討を重ね、シラバス、セミナー、講習の充実化を図った。生徒の学習意欲は高まり、自分から進んで学ぶ姿勢ができてきた。ＩＣＴを活用した帝塚山教育の一層の充実を図るため、平成27年度にＩＣＴ教育の推進母体として中高ＩＣＴ委員会を立ち上げ検討を進め、平成28～30年度の３ヵ年でＩＣＴ機器等を計画的に整備しプロジェクターを全教室、演習室、理科専科教室に設置するほか、・教員タブレット（Surface、Arrows）の導入・無線LAN環境の全館整備と計画的にＩＣＴ環境の整備を進めた結果、ＩＣＴ機器を活用した授業は着実に増加した。中高合わせて平成28年度は２学期480件、３学期460件、平成29年度は１学期989件、２学期2,326件、３学期511件となっている。生徒の感想から「プレゼンテーションやパワーポイントの作成に慣れることができた」とあるように、実際に使い、人に伝えるツールとしてＩＣＴ機器が利用されている。また、様々なプログラムを実施している特色教育については、平成29年度より、グローバル教育として、高校１年生のエンパワーメントプログラムや高校２年生のボストン大学研修など国際交流プログラムを通して、自分で課題を見つけその解決を図り表現する力を育成した。 ［課題］ 平成30年度にＩＣＴ機器の整備を完了し、ＩＣＴを活用した授業革新とともに教員のＩＣＴ活用指導力の向上を図り、公開授業などさらに普及に向けた取組を行なうとともに、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた教科指導の充実を図る。高１から導入しているClassiの研究を進め、積極的利用を推進していく。併せて教員の負担軽減のため校務の効率化をより一層促進していかなければならない。

本年度の重点目標	具体的目標	総合評価
１．個性を伸ばす教育の実践	①　建学の精神に基づく教育目標の共有化 ②　教科指導の充実強化 ③　特別活動･道徳教育の充実強化 ④　進路指導の充実強化	A 一人一人の子供を大切にする４つの力の教育、「知」知識を６年間(3年間）でしっかりと身につける（思考力、判断力、表現力）、「情」、「意志」、「躯幹」クラブ活動では忍耐力、克己心、達成感、縦横の連携を学び、学校行事では、達成感、協調性、伝統を受け継ぐ姿勢などを学んでいる。これらは、今後ますます求められる協調性、探究心を育てるために重要である。４つの力の教育の表れとして、勉強・クラブ・学校行事を高校３年間、真剣に取組むことができるようになっている。特にコーラスコンクールの取り組みが高校３年生に成長するにつれ積極的になり素晴らしいものになっている。そして、高校３年生まで勉学とクラブ活動を両立しながら、自分が目標とする大学へ進学した。学校全体的に大学合格実績は順調に伸びている。特に、国公立大学志向は高く、平成30年度は、総数209名（現役146名）である。
２．入学志願者・入学者の安定的確保	①　各学校との連携強化 ②　募集活動・広報活動の強化	
３．教育の意識改革 ・行動改革の実施	①　組織運営の充実強化 ②　学校リスクの対策強化 ③　財政健全化策の強化 ④　学校評価の実質化 ⑤　教員評価の実施推進	

評価は４段階【Ａ：十分である（よくできた）、Ｂ：ほぼ十分である（できた）、Ｃ：あまり十分でない（あまりできなかった）、Ｄ：改善を要する（できなかった）】

２.-①　自己評価（教育活動に関するもの）

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題 ・改善方策
教育目標・教育計画	教育目標の周知徹底	教職員への周知徹底はもとより、学校教育目標を保護者会や育友会総会等で確実に伝え理解いただく。（複数回実施）	A	A	教育目標の他、学校運営・行事計画等をまとめた冊子を、年度当初に全教職員に配付し、周知徹底を図った。また、保護者には年４回の保護者会に加え、年２回の育友会総会において学校教育目標を説明し、理解いただいた。	今後も保護者会、育友会総会・委員会を通して教育目標を伝達していく。
	教育計画の立案・実行	学校運営・学年運営・教科運営計画を作成して、実行する。	A		学校運営・学年運営・教科運営の各計画を冊子にまとめ、年度当初に全教員に配付し、周知徹底を図るとともに、共通理解のもと実行した。	新しい指導要領について整理と検討を重ねる。
	教育課程の工夫改善	平成32年大学入試制度改革を踏まえた教育課程の工夫と改善を検討する。	A		年３回開催した教育課程編成委員会が中心となり、平成32年大学入試制度改革を見据えた教育課程を検討した。改善を加えた教育課程は平成30年度から順次実行した。	新たな大学入試制度に向けての検討を始める。
研究・研修	研修計画の立案・実行	研究テーマに沿った研修を計画的に実施する。（複数回実施）	A	A	校務分掌に沿い、「進路」、「入試」、「教育相談」、「人権」等をテーマにした年７回の研修会を計画し、実施した。	研修内容の更なる充実を図る。
	研修成果の活用	研修における成果を、教育力の向上や日常の教育活動に生かす。	A		進路指導や人権教育などの研修成果を、日常の教育活動にフィードバックし、特に生徒への声かけに直接生かすことができた。	進路指導や人権教育の研修内容のさらなる充実を図る。
	授業実践力の向上	互見授業を含む授業研究により教員の教育力や指導力を向上させる。（複数回実施）	A		公開授業を各教科１回以上、互見授業は３週間の期間を設けた。また、ＩＣＴ機器の使い方を紹介し、教員の指導力の向上に努めた。	ＩＣＴ機器を用いた公開授業を増やしていく。
教科指導	学習指導計画の実質化	年間カリキュラム、教科シラバスを作成して、実行する。	A	A	年度当初に各学年・各コースの特性を生かしたカリキュラム、シラバスを作成し、計画通り授業を実施した。	６か年一貫教育の観点から発達段階に即した内容に整理する必要がある。
	ＩＣＴ教育の促進	３年計画でＩＣＴ機材の利用を推進して、利用頻度を高める。	A		ＩＣＴ機器を活用した授業は着実に増加した。中高合わせて平成28年度は２学期480件、３学期460件、平成29年度は１学期989件、２学期2,326件、３学期511件となり、今年度は１学期1,330件、２学期3,530件となっている。	ＩＣＴ機器の整備が完了したことから、今後は、ＩＣＴを活用した授業革新とともに教員のＩＣＴ活用指導力の向上を図り、併せて教員の負担軽減のため校務の効率化をより一層促進していくことが肝要である。
	アクティブ・ラーニングの促進	アクティブラーニング教育の研究と活用実践する。	B		アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた教科指導の充実に向け、教科会を中心に、アクティブ・ラーニングの研究、各教科別授業改善モデル（事例）の考察を重ねると同時に、可能な限り順次実践に移した。	アクティブ・ラーニング教育の導入に向けてさらなる整理と研究をすすめ、公開授業をする。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題 ・改善方策
特別活動・道徳教育	特色教育の充実	６年間を見据えた特色教育を行う。	A	A	キャリア教育講演会（１年生・２年生）、京都大学女子校生車座フォーラム、阪大いちょう祭（４月30日実施：94名参加）、京大キャンパスツアー（７月13日実施：89名参加）、神戸大工学部見学会（７月20日実施：22名参加）等の特色教育を実施した。	グローバル教育との連携を図る。
	部活動の活性化	生徒の活動状況を把握して、積極的に活動を進める。	A		理科部ロボット班が世界大会（Robo Cup 2018 Montreal CANADA）に出場した。また陸上競技部、ダンス部、ギターマンドリンクラブ、放送部、数学研究部は、全国大会出場を果たした。	高校に入っても継続するように指導する。
	人権・道徳教育の推進	年間計画を作成して、全体、ホームルーム（ＨＲ）、授業を進める。	A		人権教育推進委員会が中心となり計画立案した情報モラルや世界の子供問題等のテーマをもとに人権・道徳教育を実施した。	今後も人権教育推進委員を中心に計画を立てる。
進路指導	情報の共有化	進路状況（内外）を把握するため、頻繁に会議を行う。	A	A	最新の入試動向、受験実績等の情報を、進路指導部が収集、分析し、その情報等を担任教員と共有するとともに、連携を強め指導にあたった。	学年会などに進路指導部長が細かく指示するなど組織的な運営を行う。
	進路指導の充実強化	教務部、進路指導部が中心に計画を立てて、実行する。（進路指導満足度70%以上）	A		年５～６回の全国模試を校内で実施した他、大学教員・専門家による出張講義・出前授業、教科別・志望別の大学受験セミナーを実施した。また、進路指導の更なる充実強化に向けて継続実施しているアンケートを、本年度卒業者にも行った。進路指導に対する満足度は79.0%であり、昨年度77.0%より約2ポイント向上した。 進学実績は、国公立大学209人（東大４人、京大19人、阪大14人、医学部医学科22人等）。	進路指導報告会、講演会を今後も計画していく。
教員評価	自己評価推進	教員の自己評価を推進して、日常の教育の改善を図る。	B	B	教員評価の実施には至らなかったが、生徒対象の授業アンケートに加えて、全教員にアンケートを実施した。授業、校務分掌の他、学校行事、クラブ活動等の成果を自己分析し、その結果を次年度の教育活動に役立てるよう指示した。	授業を見直すための生徒対象アンケート、自分自身を見直すアンケートを今後も続ける。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題 ・改善方策
教育連携・内部進学	帝塚山大学との連携推進	帝塚山大学教授による特別講義を実施する。（１回実施）	A	B	高校２年生を対象に、２月20日に帝塚山大学教授による出張講義を実施した。他、理科部ロボット班と大学現代生活学部こども学科の学生が連携した小学生対象のロボット教室を継続実施した。	理科部ロボット班とこども学科との連携に加え、大学教授による出張講義を今後も継続実施する。
	帝塚山小学校との連携推進・小中内部進学の充実	帝塚山中学校・高等学校教育を内部児童・保護者に伝え、内部進学を推進する。	B		帝塚山中学校とともに、帝塚山小学校の６年生保護者対象内部推薦説明会、５年生保護者対象説明会、５年生生徒対象見学会・体験授業に加え、４年生保護者対象説明会を実施した。帝塚山小学校からの内部進学者は在籍者73人のうち34人、46.6%で、昨年より減少した。	制度化されて４年目の運用となるが、小学校からの内部推薦充実化に向け今後検討が必要である。
	中高内部進学の充実	帝塚山高等学校の教育目標・方針等を保護者に十分説明し理解いただく。	B		帝塚山中学校からの内部進学者は在籍者340人のうち316人、92.9%で、例年より外部進学が増えた。	内部進学を今後も充実させていく。

評価は４段階【Ａ：十分である（よくできた）、Ｂ：ほぼ十分である（できた）、Ｃ：あまり十分でない（あまりできなかった）、Ｄ：改善を要する（できなかった）】

２.-②　自己評価（学校経営に関するもの）

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題 ・改善方策
組織運営	組織運営目標及び方針の周知徹底	「知・情・意志・躯幹の力」の教育を周知徹底する。（複数回実施）	A	A	管理職等による運営委員会を年25回実施し、進路、教育課程、生徒指導等の連絡・報告を密にするなど組織運営の充実に注力した。また、年度当初に、「知・情・意志・躯幹の力」の教育の周知徹底を含め、学校運営・学年運営・教科運営の各計画をまとめた冊子を全教職員に配付し、共通理解を図るとともに、朝礼及び年12回の合同職員会議において、目標及び方針の都度確認を行った。	水曜日の会議を今後も実施し、組織運営、方針の徹底を図る。
	教員の適正配置	年度の教育方針に基づき、校務分掌を踏まえた適正な配置を行う。	A		必要とする教員数を配置するとともに、教科間のバランス、男女比及び年齢構成比を考慮するなど、適正な教員配置を実施した。	教員がどの部署でも活躍できる体制にする。
	会議運営の充実	校長の諮問機関として、課題解決の会議として機能させる。	A		年度当初の計画に基づいた会議、必要に応じて開催した臨時の会議の他、学校法人の協力を得ながら、都度課題解決を図った。	教員間の連携を一層深める。
安全管理・保健管理	学校安全計画立案	学校安全計画を立て、実施する。	A	A	学校安全計画を立てるとともに、掲示物などを通じて緊急体制について周知徹底した。	緊急体制に教員全員が対応できるようにする。
	学校防災計画立案	学校防災計画を立て、防災訓練を実施する。（年３回実施）	A		ＡＥＤを用いた救命救急講習会及び消火訓練を７月、12月、３月計３回計画した。	火災避難訓練、地震避難訓練を今後も実施する。
	危機管理体制強化	危機管理マニュアルの周知徹底のうえ、避難訓練を実施する。（年３回実施）	A		ＡＥＤを用いた救命救急講習会及び消火訓練を７月、12月、３月に実行した他、11月に学園前キャンパス一斉の避難訓練を、幼稚園、小学校、高等学校及び大学と合同で実施した。	救急救命講習、消火器取扱講習を今後も実施する。
	学校保健計画立案	学校保健計画を立て、実施する。	A		生徒指導・学年・保健室が協力して学校保健計画を立て、４月～５月に健康診断を実施した。また、養護教諭に加え、看護師を常に配置した。	健康診断、検尿などを今後も実施する。
募集活動	募集計画の立案・実行	年間を通して計画を立て募集活動を行う。	A	A	校内での入試説明会を年３回予定したが、台風のため第１回目は中止となった。参加数は394家庭で、昨年度より23家庭減少した。また、一昨年度よりＷＥＢ出願を導入している。	入試説明会、学校見学会を今後も充実する。
	広報活動の強化	各説明会及びホームページを通して、教育内容の説明を行う。（延べ志願者数昨年度より増加）	B		校内での入試説明会説明会の他、ホームページの「校内ニュース・トピックス」により最新の教育活動を発信した。内部進学者を除く志願者数は703人で、昨年度より62人減少した。	ホームページの内容を適宜更新する。
	関係機関との連携強化	関係諸機関との連携を強化して、時代に即した募集活動を行う。	A		進学塾、予備校、進学情報会社等外部機関の協力を得ながら、募集活動の更なる充実強化を図った。	１年間を通して関係諸機関との情報交換を密にする。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題 ・改善方策
学校評価	自己評価の実施	自己評価を実施し、公表する。（総合評価「Ａ」確保）	A	A	高校２年生、３年生の保護者を対象にアンケートを継続実施した。アンケート回収率は、２年生は81%、３年生は81%で、主に、教育課程、学習指導、進路指導等で高い評価を得た。生徒アンケートの他、保護者アンケート、卒業生アンケートの各結果を踏まえ、自己評価を実施し、その結果をホームページで公表した。	高校２、３年生の保護者にアンケートを今後も続ける。
	学校関係者評価の実施	学校関係者評価を実施し、公表する。（総合評価「Ａ」確保）	A		自己評価のうちＡ評価が全項目の約80%であること、また学校関係者評価委員会からの意見に対し改善方策を示していることにより、同委員会から、本校の運営は良好との判断を得た。同評価結果はホームページで公表している。	学校関係者評価は今後も続ける。
学校運営	クラス数の確保	入試状況を見ながら適正クラスを確保する。（１学年９クラス編成）	B	A	入学者347名で10クラスとなった。計画クラス数より１クラス増加した。	教育計画どおり９クラスにする。
	物件費の節減	厳正な予算執行し、節減を行う。（印刷費10%削減）	A		ペーパーレスの奨励、ＷＥＢ出願導入により、募集要項、入学手続書類関係の印刷経費および袋詰作業委託料等の募集関係印刷物の経費は昨年度比約23%削減することができた。また、保護者への案内にさくら連絡網（メール配信）を活用したことにより、担任業務の軽減が図れた。	保護者への連絡にとどまらず、職員間もメールで情報交換をする。

評価は４段階【Ａ：十分である（よくできた）、Ｂ：ほぼ十分である（できた）、Ｃ：あまり十分でない（あまりできなかった）、Ｄ：改善を要する（できなかった）】

３．学校関係者評価

意　見	改善方策
① 保護者アンケート結果から特筆すべき点はあったか。結果に基づき改善された点があれば教えてほしい。	① 保護者アンケートの中で、生徒の体育祭の出番が少ないとの意見があり、昨年は学年企画を新たに実施した。生徒からの評判も良く、今年はさらに充実させていきたいと考えている。
② 教員評価の自己評価がＢの理由はなぜか。	② 評価項目は、教員の活動内容、指導方法やアプローチ方法等多岐に渡っている。それを項目の比較考慮なしに指標や基準で評価を行うという点に課題があり、全教員や生徒の授業アンケートを実施しているものの、教員評価制度が十分に実施されているとは言い難いことから、Ｂ評価としている。今後も引き続き、教員評価の実施に向け、検討していく。
③ 評価項目の選定基準はどのようなものか。	③ 学園の第４次中期計画に基づいて選定している。
④ ソフトウェア「Ｃｌａｓｓｉ」は高校１年生から導入されているが、中学生への拡大は検討されているのか。また、ソフトの活用方法を含め、情報リテラシーの向上や、指導や管理の方策についても検討が必要ではないか。	④ このソフトウェアの導入については、2020年度大学入試改革を見据え、ポートフォリオに対応すべく、現時点では高校での運用で考えている。「Ｃｌａｓｓｉ」にはかなり多くの機能があり、全てを把握して使いこなしておらず、生徒に対しても限定的な使用に留めている。ご指摘のとおり、ソフトの活用や学校での管理方法についても引き続き検討していく。
⑤ 内部進学率の数字の低さを見ると、同じ学園としてのつながりが少なくなっているようで寂しい。幼稚園からの情操教育も大切にしながら、小学校段階での学力面での向上を図っていくという要素も必要ではないかと考える。	⑤ 学園全体としても、幼稚園から大学までの連携強化のため、教育連携室が２年前に設置され、改善に努めている。年度により中学校への内部進学率が異なるのは、保護者の方の意向が多様化しているという側面もあり、見学会や体験授業などの機会を設けて、内部進学への魅力をより感じていただけるよう心がけている。内部進学率の向上を目指し、小中管理職会議で話し合いを重ねながら、これからも方策を検討・実施していく。